

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果について

鹿角市教育委員会

I 実施の状況

1. 調査の目的

- (1) 国が、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析することにより、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各学校が、各児童生徒の学力や学習状況を把握し、児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) 各教育委員会、学校等が、(1)及び(2)の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 実施対象学年…小学校第6学年、中学校第3学年

3. 調査の内容

(1) 教科に関する調査

○国語A、算数・数学A 主として「知識」に関する問題

○国語B、算数・数学B 主として「活用」に関する問題

(2) 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

4. 実施期日…平成28年4月19日(火)

II 教科に関する調査の結果

1 教科別平均正答率について

小学6年生		国語A	国語B	算数A	算数B	平均
全国		72.9	57.8	77.6	47.2	51.1
県	平均	77.4	64.0	82.0	51.8	55.0
	全国比	+ 4.5	+ 6.2	+ 4.4	+ 4.6	+ 3.9
市	平均	78.4	62.3	83.9	51.3	55.2
	全国比	+ 5.5	+ 4.5	+ 6.3	+ 4.1	+ 4.1
	全県比	+ 1.0	- 1.7	+ 1.9	- 0.5	+ 0.2

中学3年生		国語A	国語B	数学A	数学B	平均
全国		75.6	66.5	62.2	44.1	49.7
県	平均	79.1	72.4	66.6	48.4	53.3
	全国比	+ 3.5	+ 5.9	+ 4.4	+ 4.3	+ 3.6
市	平均	77.1	68.7	64.5	46.7	51.4
	全国比	+ 1.5	+ 2.2	+ 2.3	+ 2.6	+ 1.7
	全県比	- 2.0	- 3.7	- 2.1	- 1.7	- 1.9

○良好な点

例年同様、小・中どちらも全国平均正答率を上回っている。

県の平均正答率と比較すると、小学校では、主として「知識」に関する問題で県を上回り、主として「活用」に関する問題で県を下回っている。中学校では、いずれも県を下回っているが、その差は昨年度よりも小さくなっている。

●課題

小・中ともに「活用」に関することが挙げられる。県平均との差は小さくなってきているので、「知識」を「活用」できるように引き続き授業改善を図りたい。

2 領域別の平均正答率について

小学校 国語A	鹿角市	秋田県	全国
話す・聞く	80.4	82.9	79.2
書くこと	79.6	77.8	72.8
読むこと	79.6	81.3	78.5
言語事項	77.8	76.3	71.1

小学校 国語B	鹿角市	秋田県	全国
話す・聞く	54.4	58.2	51.1
書くこと	59.4	60	53.4
読むこと	75.6	76.6	69.3
言語事項			

小学校 算数A	鹿角市	秋田県	全国
数と計算	86.9	84.4	80.5
量と測定	83.3	82.5	77.0
図形	84.6	82.3	78.8
数量関係	74.2	73.8	68.5

小学校 算数B	鹿角市	秋田県	全国
数と計算	48.2	48.8	44.4
量と測定	48.4	47.4	43.7
図形	40.3	38.3	36.3
数量関係	46.3	47.2	42.9

中学校 国語A	鹿角市	秋田県	全国
話す・聞く	82.1	82.5	78.9
書くこと	77.8	79.6	73.7
読むこと	79.6	81.8	78.6
言語事項	74.4	76.8	73.9

中学校 国語B	鹿角市	秋田県	全国
話す・聞く			
書くこと	60	65.2	58.3
読むこと	68.7	72.4	66.5
言語事項			

中学校 数学A	鹿角市	秋田県	全国
数と式	67.1	69.2	65.9
図形	71.1	72.4	67.1
関数	52.1	56.8	52.0
資料の活用	61.4	61.3	56.5

中学校 数学B	鹿角市	秋田県	全国
数と式	51.7	54.2	51.5
図形	38.6	36.6	33.3
関数	41.9	44.4	41.4
資料の活用	51.6	53.3	39.3

○良好な点

全ての領域で全国の前正答率を上回っている。

●課題

- ・ 小学校の国語Bにおける「話す・聞く」と「書くこと」の領域が50%台である。県及び国も同様の傾向を示している。
- ・ 小学校の算数Bでは全4領域で50%以下である。（「図形」の領域で県平均を上回っている。）
- ・ 中学校の数学Aにおける「関数」の領域が50%台で、他の領域とのバランスの点からも課題と捉えられる。
- ・ 中学校の数学Bでは「図形」と「関数」の領域が50%以下である。（小学校同様、「図形」の領域が県平均を上回っている。）

3 設問別の正答率について（○…良好な点、△…やや課題、●課題）

（1）小学校の国語

○無回答率が県平均に比べて低いこと（A問題、B問題のどちらにも当てはまる傾向）

△登場人物の人物像について、複数の叙述を基にして捉えること

△ローマ字を書くこと及び読むこと

- グラフを基に、分かったことを的確に書くこと（B問題）
- 次の3つは、全国的に同様の傾向がある（いずれもB問題）
 - ・話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って質問すること
 - ・目的や意図に応じて、グラフや表の結果を基に、自分の考えを書いたり、文章構成の効果を捉えたりすること
 - ・目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読むこと

（2）小学校の算数

- 無回答率が県平均に比べて低いこと（A問題、B問題のどちらにも当てはまる傾向）
- 示された式の中の数値の意味を解釈し、それを記述すること（B問題）
- 四角形を構成する角の大きさを基に、四角形を並べてできる形を判断すること（B問題）
- 次の2つは、全国的に同様の傾向がある（いずれもB問題）
 - ・解釈が正しくないことの原因を、グラフの視覚的な変化の様子にとらわれずに、読みとることができる情報を根拠にして説明すること
 - ・除法の式を、並べてできた形と関連づけ、角の大きさを基に、式の意味を説明すること

（3）中学校の国語

- 目的に応じて必要な情報を読み取ること（B問題、県平均を上回っている）
- 資料を基にして自ら課題を決めてはいるが、課題の解決に向け、具体的な情報収集の方法を考えること（B問題、全国的にも同様の傾向）

（4）中学校の数学

- 全国の分析では課題と捉えられている以下の2つのことについて、どちらも全国を10ポイント以上上回っている上、県平均よりも良いこと
 - ・資料を整理した表から最頻値を読み取ること（A問題）
 - ・資料の傾向を的確に捉えて判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明すること（B問題）
- △自然数の意味の理解（A問題）
- 垂線の作図の方法（A問題）
- 関数（比例や反比例）に関わること（A問題、B問題どちらも）
- 与えられた式を用いて、問題を解決する方法を数学的に説明すること（B問題）

Ⅲ 質問紙調査の結果

1 概要

小・中どちらも、ほぼすべての項目が良好な結果である。「夢創造 school 事業」や「ふるさと生き生きネットワーク事業」、各校・各地域で一体となって取り組んでいるメディアの適切な使用に係る取組等が、全国平均のみならず、県平均をも上回る成果として出ている。

小学校では「新聞をほぼ毎日、または週に1～3回程度読んでいる」児童の割合や「テレビのニュース番組やインターネットのニュースをよく見る」児童の割合が全国平均・県平均よりも多い。中学校では、「家の手伝いをよくしている」生徒が全国平均・県平均よりも多い。

2 小・中に共通して良好な項目

- 毎日、同じくらいの時刻に寝ている割合が多いこと
- 将来の夢や目標を持っている割合が多いこと
- メディアとの適切な利用に関すること
 - ・平日1日当たり、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間が少ないこと
 - ・平日1日当たり、テレビゲーム等をしている時間が少ないこと
 - ・平日1日当たり、携帯電話等で通話やメール、インターネットをしている時間が少ないこと
- 今住んでいる地域の行事に参加している割合が多いこと
- 地域社会などでボランティア活動に参加したことがある割合が多いこと

3 やや課題となる項目

(1) 小学校

- △「自分には、よいところがある」と思う児童が県平均より若干少ないこと
- △「家の手伝いをよくしている」児童が全国平均より5%少ないこと
- △「読書は好きだ」という児童が全国平均より若干少なく県平均より6.6%少ないこと

(2) 中学校

- △「友達の前で自分の考えや意見を発表することが得意」という生徒の割合が、全国平均・県平均よりも少ないこと
- △「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」生徒が県平均より7.8%少ないこと
- △「平日1日あたり読書を全くしない」生徒が県平均よりも7.3%多いこと

IV 今後の市教委の施策の方向性

これまで取り組んできている施策がおおむね良好な成果につながっていることから、以下の事業を引き続き実施し、検証を加えながら一層の充実を図っていく。（児童生徒学力向上対策事業、ふるさと・キャリア教育推進事業、情報教育環境整備事業、ふるさと生き生きネットワーク事業、かづの夢創造 school 事業）また、メディアとの適切な利用に関することや、望ましい生活習慣づくり等は、各校で行われている教育活動と家庭との連携の成果であることから、引き続き、適切な指導や取組が為されるよう、お願いをしていく。

一方、やや課題となることについては、学校教育だけではなく家庭教育や社会教育等の様々な場面での体験活動や経験を通して育まれるものも少なくないことから、学校をはじめとする様々な関係機関や団体等と連携しながら取組を検討していく。